

令和2年（2020年）10月12日
熊本県教育庁教育総務局文化課

令和2年度（2020年度）熊本県近代文化功労者の決定について

- 県教育委員会において、本年度の熊本県近代文化功労者を次の3名（現存者2名・故人1名）に決定しました。
- また、顕彰式を11月13日（金）に県庁行政棟本館5階知事応接室にて行います。

1 顕彰者

まつだ いちろう
松田 一郎 氏（学術） 昭和8年（1933年）生（満87歳）

小児難病の多数の遺伝子異常を解明し、新しい疾患の発見や疾患遺伝子の同定を行うなど我が国及び世界の小児医療の発展に大きな業績を残した。また、県内における小児難病を診断・治療する仕組みづくりにも大きく貢献した。

くどう けいち
工藤 敬一 氏（学術） 昭和9年（1934年）生（満86歳）

日本中世の荘園史の第一人者として、荘園や公領の成立過程や存在形態、構造を解明するなど、我が国の中世史研究の進展に大きな業績を残した。また、県内各地の市町村史の編纂に関わり、文化財保護審議会委員等として地域の文化財保護にも大きく貢献した。

はらだ しげ
原田 茂 氏（文化） 故人 昭和59年（1984年）没（享年87歳）

我が国における洋服や洋裁技術の先達として、その普及・発展に多大な業績を残した。また、永年にわたり民間の服飾専門学校の教師として後進の育成に尽力し、我が国のファッション業界発展の礎を築いた。

2 顕彰式

日時：令和2年（2020年）11月13日（金）13時30分～14時15分
会場：熊本県庁行政棟本館5階 知事応接室

（参考）熊本県近代文化功労者の顕彰について

本県出身者又は在住者（故人を含む）で、教育・学術・芸術・宗教・産業等あらゆる分野で近代文化の発展に貢献し、その功績が顕著である方を熊本県近代文化功労者として顕彰している。昭和23年度の第1回から本年度で70回目を迎える。これまでの顕彰者の累計は今回の3名を含めて299名に及ぶ。

<問い合わせ先>

熊本県教育庁教育総務局文化課（内線6714）

担当 やなぎ いたう あきら
柳・伊藤（昭）

TEL 096-333-2704 FAX 096-384-7220



まつだ いちろう (学術)
松田 一郎 (学術)

昭和8年(1933年)1月1日 生
(満87歳)

【写真は本人提供】

松田氏は東京都で生まれる。北海道大学医学部を卒業後、カナダ・マギル大学、アメリカ・ジョーンズホプキンス大学で研究した後、昭和51年に熊本大学医学部教授に就任し、医学部附属病院長などを務め平成10年に退官した。

氏は、先天代謝異常症をはじめとする小児難病における遺伝子の分子レベルの異常と疾患との関係を明らかにする研究を行った。遺伝子の構造を世界で初めて明らかにした疾患として、OTC欠損症、アルギナーゼ欠損症、メープルシロップ尿症、GPS1欠損症などがあげられる。また、先天代謝異常症での「病態と遺伝子変異との関連」に注目し、重症度の違い、家族内発症のメカニズムなどを患者それぞれの遺伝子を解析することにより明らかにした。

熊本県内にて小児難病を新生児期に診断するシステムの開発とその普及に大きく貢献した。多くの基幹病院に専門領域を持たせ、小児難病の患児は専門診療をおこなっている施設に紹介して診療をおこなう仕組みの整備に取り組んだ。熊本赤十字病院の小児救急、熊本市市民病院の小児循環器、熊本中央病院の小児腎臓などの専門領域は、いずれも氏の小児医療のネットワーク構想から整備が進んできた。

熊本大学医学部の小児科学講座教授を22年間勤め、その間、多くの小児科医を育て、熊本県の小児医療のレベル向上と乳児死亡率の改善に大きく寄与した。また、多くの障がいのある小児の医療に取り組み、熊本県の障がい児医療にも大きく貢献した。これらの功績から、「熊日賞」の他、「日本先天代謝異常学会賞」、「日本人類遺伝学会賞」、「日本医師会医学賞」、「日本小児科学会賞」など多数の医学界の賞を受賞。また、平成11年に「紫綬褒章」、平成19年に「瑞宝中綬章」を受けている。

昭和51年4月	熊本大学医学部教授(小児科学講座)
平成元年4月～3年3月及び7年4月～9年3月	熊本大学医学部附属病院長
平成10年3月	熊本大学退官
平成11年4月	北海道医療大学大学院看護福祉科教授
平成18年～21年	同 学長



くどう けいいち
工藤 敬一（学術）

昭和9年（1934年）3月30日 生
（満86歳）

【写真は熊本市提供（平成14年撮影）】

工藤氏は、現在の山鹿市鹿本町に生まれる。京都大学法文学部史学科を卒業後、京都大学大学院文学研究科に進み、昭和37年に熊本大学法文学部講師として着任した。以後教養部・法文学部・文学部で教鞭をとり、その間、附属図書館長や文学部長などを歴任し、平成11年に熊本大学を定年退官した。

氏は、日本中世の荘園史を主要なテーマとしており、多くの成果をあげている。それまでの荘園制研究の成果をもとに提唱されていた「荘園公領制」について、さらに研究を進め、整理を行った。その中で、11世紀から16世紀末までの土地制度として長いスパンで捉えられていた「荘園公領制」を、12世紀から13世紀の土地制度を示す概念として明確化した。この成果は、1970年代初頭までの中世成立史研究を総括するものと評価される。氏の研究により、「荘園公領制」の成立が中世国家のひとつの指標として捉えられるようになり、その後の研究の進展に寄与した。また、氏は九州における「荘園公領制」の成立過程や存在形態、構造を詳細に解明した。これらは日本の中世史研究において特筆すべき業績であり、歴史学界に与えた影響は非常に大きい。氏は、論文発表のほか、自身の研究成果をもとに学術書から一般書まで多数の著書を執筆・監修した。代表的なものに、『九州庄園の研究』（1969）、『荘園の人々』（1978）、『荘園公領制の成立と内乱』（1992）、『北条時宗とその時代』（2000）、『荘園制社会の基本構造』（2002）がある。

教育普及にも精力的に取り組み、大学在籍時の学生の指導だけでなく、県民向けに公開講座を担当するなど、熊本の歴史研究及びその発展・普及に尽力した。また、熊本市や玉名市、山鹿市など多くの市町村史の編纂に関わったほか、熊本県や熊本市をはじめ各地の文化財保護関係の委員等を歴任しており、地域の文化財保護等にも大きく貢献した。

昭和37年～ 熊本大学法文学部講師
昭和41年～ 熊本大学教養部助教授・教授
昭和51年～ 熊本大学法文学部教授
昭和54年～ 熊本大学文学部教授
平成11年 熊本大学定年退官



はらだ しげ
原田 茂 (文化)

明治29年(1896年)10月25日 生

昭和59年(1984年)7月9日 没

(享年87歳)

【写真は学校法人文化学園提供】

原田氏は、菊池郡合志村平島（現合志市栄平島）に生まれる。尚綱高等女学校を卒業後、大正8年に上京して和洋裁縫女学校で和裁を学び、卒業後は兵庫県にある高等女学校の裁縫教師となったが、再度上京して文化裁縫学院に入学した。文化裁縫学院は大正12年に我が国初の洋裁教育の各種学校として認可され（文化裁縫女学校と改称）、氏は卒業と同時に同校卒業生として初めての教師となり、以後60年間にわたり同校（のち文化服装学院と改称）で教育者として尽力した。

大正時代、日本において洋裁が広まり始めた当初から、学校や講習会などで洋裁の指導や講習を行い、雑誌などに洋裁の仕立て方やデザインを発表するなど、日本における洋裁や洋服の先達としてその普及に大いに貢献した。1936年創刊の服装研究雑誌『装苑』に多くの洋裁・洋服作品を発表したほか、雑誌『主婦之友』では子供服の作り方を発表するなど、戦前・戦後における日本のファッション界をリードした。

昭和20年の大空襲により文化服装学院が荒廃後、同校の再建に尽力し、 Apparel業界に適応した服装教育へ向けて学院の組織及びカリキュラムの改革を進めた。また、通信教育講座に先進的に取り組んだほか、地方関連校での洋裁の講師を引き受けるなど、洋裁の地方普及にも尽力した。学院からは、高田賢三、コシノヒロコ、コシノジュンコ、山本耀司など、多くのファッションデザイナーが輩出されており、日本のファッション業界を長年支え続けた。また、現在も毎年約1500人が入学して学んでおり、氏の教育が脈々と受け継がれている。

長年の服装教育者としての活動が評価され、各種表彰を受けている。主なものには、アメリカン学術賞（昭和41年）や勲四等瑞宝章（昭和42年）がある。

大正13年～昭和11年 文化裁縫女学校教師

昭和11年～昭和35年 文化服装学院教師

昭和35年～昭和46年 文化服装学院長